

はかどりません。そうすると主人は、「いなかッペはぐずでしようがねエナア。」ときめつけます。要吉は、そういわれると、ただ、もじもじと赤くなるばかりでした。

二

でも、このごろはだいぶ仕事のこつがわかってきました。要吉は、セッセと手を動かしながら、いろんなことを考えるようになりました。

——せっかく、方々の国から送られてくるこれらのおいしい熟じゅくしたものが、店にかざられたまま、毎日毎日こうもたくさんくさって行くのはどうしたことだろう。それでいて、毎日おかみさんが売り上げの中から、まとまったお金を銀行へあずけに行くところをみると、お店は損をしていくはずはない。それではこれだけのくさったものの代はだれが払ってくれるのだろうか。

それから先は要吉にはどう考えてもわかりませんでした。

一山いくらのお皿の上には、まッ黒くなったバナナだの、青かびのはえかけたみかんだの、黒あざのできたりんごだのがのっていました。

「こんなにならないうちに、なぜもつと安くして売ってしまわないだろうなア……安くさえすれば、もつとどしどし買い手があるだろうに……。」

要吉の考えとしては、それがせいっぱいでした。

夜になると、要吉には、もつともつといやな仕事がありました。

要吉は、毎晩、売れ残ってくさったものを、大きなかごに入れて、鉄道線路のむこうにあるやぶの中へすてに行かなければなりませんでした。ごみ箱がすぐいっぱいになるのをいやがるおかみさんは、そのやぶを見つけると、夜のうちに、こッそりと、そこへすてに行けといいつけたのです。

要吉は、うんざりしてしまいました。それで、ある時、要吉は思いきって、おかみさんにいつてみました。

「こんなにならないうちに、なんとかして売ってしまうわけには行かないものでしょうか。安くでもして……。」

そうすると、おかみさんは、要吉をにらみつけていました。

「生意気おいでないよ。なんにもわかりもしなくせに。そうそう安売りした日にゃア商売になりやアしないよ。」

「でも……」要吉は、もじもじしながらいきました。

「すてつちまうくらいなら、ただでやった方がまだましですね。」

要吉は、それをいったおかげで、晩の食事には、なんにももらうことができませんでした。要吉は、お湯にも行かずに、空すき腹をかかえて、こちこちのふとんの中にもぐりこまねばなりませんで